

編集部から 地域創生関連図書の紹介

尾畑留美子著

学校蔵の特別授業
佐渡から考える島国ニッポンの未来

少子化が原因で全国各地の学校が廃校になりつつある。それらの校舎は現在、地域の文化施設やコミュニティセンターなどとして活用されている。本書の舞台は、日本酒の仕込み蔵として廃校を活用した佐渡島だ。

明治時代から続く尾畑酒造の蔵元である著者は、日本で一番夕日が見える小学校・西三川小学校を酒蔵として再生利用し、佐渡島から日本の未来を考える授業を企画。地方」をキーワードに、2014年と2015年に特別授業を開いた(本誌第1号の特集でも紹介)。熱気あふれるそれらの授業を紙面で再現したのが、本書である。



『学校蔵の特別授業 佐渡から考える島国ニッポンの未来』
尾畑留美子著 日経BP
1,600円+税

主席研究員)、二時限目「地方と仕事」(酒井穂・BOL BOP代表取締役CEO)、三時限目「地方と希望」(玄田有史・東京大学社会科学研究所教授)。

薬谷氏は、子育てしやすい地域こそ経済的にも伸び、人の創意を活かせるかどうか、地域の未来への力ぎだと感じている。酒井氏は、人を呼び込むために地方が行っている魅力発信よりも、足元にある

「一つの場所に住み続けなくてもいい。心地いいときに、心地いい場所で暮らせればいい」。本書は、それが「あたらしい移住」だと説く。著者は、ハワイに半年間、日本に3カ月、あとは世界各地を訪問して1年を過ごす企業コンサルタント。

問題を一緒に解決しようとする課題共有こそ、地域間のつながりを強めると主張。玄田氏はケインズの言葉を引用しつつ、自分を突き動かす衝動的な野心つまりアニマルスピリットが手応えある生き方を可能にし、その舞台は地方・地域だと語っている。「幸醸心」(幸せを醸す心)を校訓に奮闘を続ける、学びと出会いの「学校蔵」の講義録。(佐藤壮広)

編集部から 地域創生関連図書の紹介

本田直之著

脱東京
仕事と遊びの垣根をなくす、あたらしい移住

東京を離れることで「人も情報も厳選できるようななった」という。また、大阪から高知市へと移住した市吉秀一氏(株式会社ローカルズ代表)は、雑誌編集のキャリアを活かし、自身が惚れ込んだ高知のおいしい野菜を全国へと販売するための情報発信を精力的に行っている。

事例に登場するいずれの人も、脱東京することで「自由な時間」と「濃密な人間関係」そして「自然とのふれ合い」

を手に入れていた。「あたらしい移住」はまた、東京とのパイプも維持しつつ、複数の仕事をもち、地元の町おこしにも貢献するライフスタイルでもある。

よそ者を受け入れられる地域の懐の深さと、その地域に移り住んでくるよそ者の思いの強さ。この両者がマッチするところに、「あたらしい移住」の鍵がある。(佐藤壮広)



『脱東京 仕事と遊びの垣根をなくす、あたらしい移住』
本田直之著 毎日新聞出版
1,500円+税